

様式第1号（第3条関係）

【健康あだち21専門部会】会議概要

会 議 名	令和6年度 第2回 健康あだち21専門部会
事 務 局	衛生部こころとからだの健康づくり課
開催年月日	令和7年2月27日（木）
開催時間	午後1時30分 ～ 午後3時30分
開催場所	足立区役所 中央館8階 特別会議室
出席者	別紙名簿の内、14名
欠席者	3名
会議次第	別紙のとおり
資 料	令和6年度第2回健康あだち21専門部会 報告資料

様式第2号（第3条関係）

（審議経過）

松本学務課長より、資料1、2に沿って説明

（山下）学校の健診受診率が70%を超えていることは非常に素晴らしいことである。この健診の採血の際に、血管迷走神経反射など特に中学生女子が気分を悪くしたりすることは問題にならなかったか。また、中学生において有所見者が緩やかに増加傾向にあるように見えるが、その要因は何か、特にどの項目がこの傾向を押し上げているのか。

（松本）まず1つ目。採血時に気分を悪くしたり、めまいを起こしたりする生徒が実際にいることは認識している。小学校5年生を対象とした区の施設での検査では、泣いてしまい受診できなかったり、体調を崩して横になったりする児童もいた。中学生にも同様の傾向が見られるため、生徒にトラウマを与えないよう、強制ではないことを伝え、無理に受けさせないように声をかけをしながら安全に進める方針である。小学生では男子に体調不良を訴える児童が多く、小学5年生の健診では8割以上が男子であった。しかし、中学生ではそのような報告は少ない状況であった。全体の有所見者の割合は減少傾向にあるものの、男女別や学年別（中学2年生・中学3年生）で見ると、中学3年生で有所見となる生徒が増加している傾向がある。特に中学3年生男子では肥満の割合が半数を占め、中学2年生女子で血清脂質異常が認められた生徒が中学3年生でも同様の所見となっている状況である。しかし、これは早期に医療機関につながるきっかけになっていると考えられる。

（藤原）運動不足は世代の影響もあるのか。

（松本）そこまで分析はできていない。

（藤原）小学生でも採血を行う理由は何か。

（松本）中学2年生で行うよりも早期から取り組む必要があるとの意見があったことや、実態把握が可能であることから、早期に実施して良かったと今回の結果を受けて感じている。

（藤原）7割の受診者のうち、ほとんどが男子であるというのはどういうことなのか。

（松本）中学生は学校で健診を行うため受診率が高いが、小学生は区の施設で保護者同伴となるため、どうしても受診率が低下する傾向がある。小学5年生の健診では、1日100人来たとしても、女子は数人でその他はすべて男子であった。

（山下）369人とは。

（松本）小学5年生の全体約5000人のうち、369人が対象であった。これは令和5年度のモデル5校での実施時で、学校で実施しているため7割の受診率（269人受診）であった。

（藤原）小学校での採血がルーティンになったということでもいいか。

（松本）一部ではあるがその機会は得られている。

（藤原）採決が大変になるが、最近は二次血糖の血糖値の値とHbA1cの両方で見るので、どうせなら中2も含めてやった方が世界的なデータになる。食事の時間を確認し、随時でいい。

（松本）すでに契約済みなので、令和8年度に向けて確認していく。

（馬場（区））中学2年生の健診においても女子のコレステロール値が非常に高く出る事例があり、思春期のエストロゲンが不安定な時期に18～20歳以上の成人期の健診値と比較して良いのか、どこからを要所見とすべきかなど、とても悩ましい。血糖値

の導入については、今後学務課と一緒に検討していきたい。

（豊川）資料4ページのグラフについて、中学2年生で有所見となった生徒が中学3年生でも受診しているということでしょうか。

（松本）その通りである。

（豊川）中学2年生は分母が3566人に対して、中学3年生は510人と比較しづらいグラフになっている。また、中学3年生の51%は指導によって改善したのか、悪化したのか、直接比較しにくいがどちらなのか。

（松本）指導によって改善した。

（豊川）グラフを見ると理解しづらい。

（馬場（区））グラフのつくりは衛生部も気を付けたい。男女別に、そして全体の中で所見のある生徒がどのくらいいるのか、さらにハイリスク群の中2と中3での変化を項目ごとに並べるなど、グラフの見せ方を改善していきたい。

（藤原）指導は具体的なものではなく、採血結果を可視化すること自体が指導であると理解してよいか。

（馬場（区））養護教諭や保健師と話しているのは、例えば血圧やコレステロールの正常値、HbA1cなどが何を意味するのかを中学2年生くらいから理解できるようにしたいということ。高校では健診がなくなるため、将来的に昔と比べて今はどのくらいかと意欲をもって検査を受けたり、自身の検査結果を読めるようになることを目指している。過去には学習用のパワーポイントを作成したが、コロナの改編で変わったかもしれない。

（松本）現在は冊子を配布し、タブレットでも見られるようにしている。今年度からは小学校で「あだちっ子健康教室」を実施し、区の栄養士と保健師がクイズ形式で生

活習慣病や健康的なおやつの食べ方、睡眠の重要性などを教えている。

（豊川）受けなかった人との比較もできるといい。例えば体重とか。

（藤原）肥満傾向な人が受けていないか等はわかるかもしれない。歯もわかるといい。一方で、保育園のベジファーストの取り扱いはどうか。

（馬場（園））園によってまちまちだが、自身の園ではベジファーストがかなり浸透しており、子どもたちは「一口目は野菜から」という言葉をよく理解して野菜から食べている。取り組みは園によってまちまちだが、かなり浸透していると感じる。

（藤原）始めた頃は小学校だと「三角食べ」などから反対意見もあったが、保育園では保護者や園長などからそのような声はあったか。

（馬場（園））特にはない。なぜ野菜を最初に食べるのが良いのかなどを子どもたちにしっかり伝えることが重要である。

（松本）ちなみに、給食で一口目に野菜から食べる割合は、令和元年に小学校6年生で62%、中学2年生では66%となっている。

（藤原）野菜から食べると、虫歯にならない、血糖値が上がらない、肥満にならない、レジリエンスが高まるという効果があることがわかっている。

（倉田）齲歯も歯肉炎も生活習慣病である。健診結果を加えて比較することで、異なるデータが得られる可能性がある。DMF-Tと歯肉炎の有無だけでも追加してほしい

渡邊江北センター長より、資料3に沿って説明

（猿渡）すこやかプラザの目的において、高齢者の生活支援や感染症、災害、子育て支援などが読み取れる一方で、がんに関す

る項目が抜け落ちているように見える。アピランス（外見変化）に関する相談窓口を設けるべきではないか。1階にウィッグの展示とともにラックコーナーを設けていただけるとのことなので、冊子を置くことを検討している。

（馬場（区））猿渡さんには、理美容の協会でがんの患者の方へのアピランスに関して相談させていただいている。今回、すこやかプラザ1階アトリウムには展示スペースを設け、あだちブランドのウィッグなども展示しながら、理美容の協会と打ち合わせをして月に1〜2回相談会を開催するなど、治療前の準備や治療後の髪の管理について相談できる場も作りたいと考えている。

（猿渡）以前お伝えした頭ジラミの寸劇形式の啓発活動について、今年度は外部の依頼する業者がスケジュールの都合で実施できなかったが、区内で新たに同様の寸劇を立ち上げた。頭ジラミ以外にも野菜摂取など様々なバージョンが可能になったため、保育園などに呼びかけて再度実施していきたい。

（初鹿野）ご要望があれば、子ども関連の課とも連携しご案内をしていきたい。

（高田）訪問看護ステーションでの地域イベントで地域包括と連携して健康チェックを行うが、実際に目で結果を見ることが好評で、来年も参加したいという声が多く聞かれた。すこやかプラザのチェック機器などをより多くの人に活用してもらうためには、広報活動が大事になると思うがいかがか。

（渡邊）3月25日のあだち広報に掲載する。また、現在A4のチラシを作成中だが、できたらいろんな場所に置いて周知を図っていきたい。

（倉田）資料内10番の口腔運動機能測定器は、咀嚼力を測るのか、咬合力を測るのか。

（鳥山）「タタカ」という発音を5秒間に何回言えるかを測るもので、口腔機能の健康を体験してもらうものである。

（藤原）口腔内細菌観察器が気になるが。

（鳥山）歯垢を採取して顕微鏡で動いている細菌を見せることで、意欲的に歯磨きをさせる効果がある。

（馬場（区））フロスや歯間ブラシも使い、視覚化で訴えるものである。このような健康チェック機器は、利用者が健康作りに取り組むきっかけとなることを目指している。次の会議はすこやかプラザで開催し、実際に体験してもらいたい。

（藤原）やはり広報は大事で、このようなことを知った人だけが健康になるという逆説的なヘルスプロモーションはよくある話。これも参加人数が限定されており、それを承知した上で実施する意義と、今後どう広げていくかの戦略について確認したい。

（渡邊）特定健診の結果などどうまく結びつけて、やった人とやらない人がわかってくるといい。これから数値を見ながら検討したい。

（馬場（区））このコロナの5年間で健康作りの自主グループが340くらいから120まで減少した。健康づくり推進員も活躍してくれているものの、人数が減り層の厚みが薄くなった。格差はよくないのは承知しているが、改めて興味のある方は一度勉強していただき、街のロールモデルとなることで、これを再び増やし、健康をキーワードとした仲間作りを通じてソーシャルキャピタルを醸成するという考えがある。65歳や70歳ではなく、身体の異変を感じ始める60歳の段階でやっていただきたい。特に足立区は中小企業の従業員が多く、若い頃から健診を受けていない人もいるため、そのような人々に自身の体を知ってもらうことが重要である。

馬場衛生部長より、資料4、5に沿って説明

（吉岡）ジェネリック医薬品の使用率について、令和6年10月から選定療養制度が開始されたため、来年度はさらに高まることを期待する。

（倉田）虫歯の数は確実に減少している。これまでのフッ化物塗布やブラッシング指導、健診と治療の推進が間違いなく効果を出しているので引き続き継続してほしい。

「あだちっ子・いい歯推進園」については、外国籍の子どもが多い園では健診結果が悪い傾向にある。特に中国の家庭では祖母が子育てに関わるが多く、甘いものを与えがちである。今後は親の衛生意識が向上していくにつれ、虫歯の数も徐々に減ると考える。また、東部療育センターの講演で、摂食嚥下に問題のある子どもが増えているとの話があった。ベジファーストだけでなく、よく噛んで丸めて飲み込むという指導が重要である。

（馬場（園））小学校の教員から食べ方や鉛筆の持ち方を見切れないという話を聞き、そうすると保育園での取り組みが重要になると考えている。ただ、保育園でも家庭と連携するなど簡単ではなく、丸呑みする子どもは癖になっているのか食べるのが非常に速く直すのが難しい。箸の持ち方や鉛筆の持ち方も同様で、幼い頃からの変な癖は保育園でも直すのが難しい現状である。何か良い方法があれば教えてほしい。

（藤原）摂食の問題が発達障害の傾向と関連している可能性もある。東京科学大学でも今後の課題とさせていただきたい。

（松本）足立区の小学校では、以前ニュースで取り上げられていたうずらの卵で窒息した事故を受け、食材を給食からなくすのではなく、食べる経験をさせるためにも、よく噛むように指導を徹底し引き続き提供していく方

針である。

（山下）キャラクターの「ロクちゃん」とは。

（鳥山）六歳臼歯の「ロクちゃん」と呼んでいて、教室をやっている年長と小学1年生の間では、ベジファーストくらい浸透している。「まえばちゃん」「おくばちゃん」は乳歯で、「ロクちゃん」は永久歯なので王冠をかぶっている。

保健予防課長より、資料6に沿って説明

（山下）足立区は他区と比べて予防接種が手厚く、医師会としても感謝している。そのうえで、带状疱疹ワクチンは5歳ごとの節目の摂取になっているため、66歳の人が4年待って70歳で無料になるか、今1万円の補助で受けるかの選択肢を迫られるのは全国一律でしかないが問題である。また、無料化により不活化ワクチンを打ちなかった人が、既に生ワクチンを接種済みのため対象外となるのは不公平感がある。HPVワクチンについては、昨年夏頃から供給不足が分かっていたにもかかわらず、国の方針が遅れたため、接種機会を逃した人がいるのは大変な問題である。国の施策が非接種者を生み出してしまったと考える。

（三品）带状疱疹ワクチンについては、23区内で50歳以上の半額補助を実施している区は少数であり、全国的にはさらに少ない。65歳以上を5歳刻みで対象とするのは国の決定であり、足立区としても困っており、50歳以上の補助を継続することで救済策としている。HPVワクチンについても、夏頃からの不足は認識しており、病院での予約が困難との声も聞かれていた。国は1回以上接種していれば来年度1年間延長するという救済策を講じたが、23区の区長会としては「1回」という条件を外すよう要望した。しかし、これは未だ

に認められていない現状である。

土井こころとからだの健康づくり課長より、 資料7に沿って説明

（藤原）「ちょこ活」というのは「ちょこザップ」を意識したものなのか。

（土井）最初は「ちょい活」であったが、商標登録されていたため、「ちょこ活」になった。

（藤原）ポイント制度のようなアプリ活用は考えていないのか。

（土井）たまにご意見をいただくが、健康に関心が高い人だけが利用し、それ以外の層に広がらない懸念があるため、現時点では検討に留まっている。

（藤原）最近の野菜高騰の中で、ベジタベの取り組みについて何か言われることはあるか。

（千ヶ崎）クックパッドでのレシピ配信では、比較的安価な野菜や冷凍野菜を上手に活用するレシピを工夫して紹介している。また、体にも財布にも優しいレシピとして、市場調査も行いながら情報発信している。

（西方）私は80過ぎているが、今まで話してきたことは全部自分なりにやってきている。歯はすべて自分の歯である。肺がん治療後の吹き矢による体力維持など、日々の健康活動を実践している。人間関係も重要である。

土井こころとからだの健康づくり課長より、 資料8～10に沿って説明

（山下）卒煙支援は良い取り組みであるが、チャンピックスやパッチなどの薬の服用だけでなく強い決意がなければ成功は難しい。無料になってしまうと、とりあえず薬だけもらっておくという結果に繋がりがねず、それは大体失敗に終わる。登録者に対する電話やメ

ールによる支援など、モチベーションを維持するためのフォローアップの仕組みを合わせて導入した方が効率が良いと考える。

（土井）対象者拡大に伴い件数が増加することが考えられるため、フォローアップの実施については今後検討していく。

（藤原）高校生の喫煙が増加している問題があるが、区としては何か対策はあるのか。また、一般市販薬の過剰摂取（オーバードーズ）の問題、特に風邪薬の過剰摂取が気持ちよさを引き起こし、肝機能障害につながるケースがある。このあたり、区としても検討していただきたい。

（吉岡）薬剤師会では、小学校・中学校で薬物乱用防止教室を実施しており、そこではタバコ、お酒、そしてオーバードーズについても話している。生徒たちにオーバードーズという言葉を安易に教えないよう、薬の正しい使い方を指導するという観点から話をしている。高校生の喫煙については、手が届きにくい領域であり、今後の課題である。

（土井）区としては、高校生向けの受動喫煙防止の標語コンクールを毎年実施しているが、実際高校生への踏み込んだ介入は難しい。

（藤原）入手困難な環境整備や、どのような人が喫煙しているのかの実態把握は検討可能。しかし、それでもすり抜けるケースについては、現場の先生方やスクールソーシャルワーカーとの連携が必要である。

（山崎）ベジファーストが血糖値、虫歯、肥満に効果があるとの説明があったが、虫歯の予防効果に関するデータがあれば、今後の啓発活動で合わせて提示したい。

（藤原）現在論文を投稿中なので、終わ次第情報共有する。